

日本性科学会雑誌第5巻2号 昭和62年12月20日発行

日本性科学会雑誌

JAPANESE JOURNAL OF SEXOLOGY

VOL.5 NO.2 DEC.1987



日本セックス・カウンセラー・セラピスト協会
JAPANESE ASSOCIATION OF SEX COUNSELORS AND THERAPISTS

目 次

巻 頭 言	松本 清一	1
1. 性感の解剖・生理・生化学	笠井 寛司	3
2. 広汎性子宮全摘術後の腔再建に関する臨床的並びに組織学的検討	大久保 仁	10
3. 症 例 研 究 ...		
○ ワギニスムスの症例	金子 和子	15
○ 症 例	渡辺 景子	19
○ 62年4月の検討会から	掘 一子	22
4. DANJOにおける性的刺激のパターンについての	野末 源一	27
5. 新刊紹介または書評	金子 和子	29
6. 編 集 後 記		31

性感の解剖・生理・生化学

滋賀医科大学産婦人科

笠井寛司

今回のテーマは、機能と形態との結びつきと
というような話になるが、残念ながら我が国では、
機能については、例の Masters & Johnson
の詳細な研究にみられるような対象を選ぶこと
さえ不可能であるという現実がある。もし時間
があれば、少数例ではあるが、私が本人の許可
を得られた例をお話したい。先ず話の順序と
して、外性器の解剖学を改めて見直してみよう
と考えて今までにやってきた統計の数値をお示
ししたい。

私は一時期、アメリカ系の病院に勤務し、か
なり多数の欧米系の女性を診察したが、これと
日本人とを比較してみると、欧米の論文をその
まま受けとめるということは、決して正しくな
いということに気づいた。しかし、改めて日本
人とはということになると、戦前を含め、これま
であまりにも調査対象数が少ないということ、
それに現在のように computer ができていない
ので、計測値もいまひとつ十分な理解を得られ
ないものだ。そこで、自分でとった data を
computerize して、解剖学の教科書に戻って
考えてみた訳である。

現在までの対象者数は 8,000 例を超えている。
しかし中には、ホルモン環境を調べてみると、
酵素系の欠損があるとか、ステロイド・ゼネシ
スに問題があるものがあるので、これらを省い
て、本日の統計は 7,981 例という数字で出して
ある。

1. 年齢区分

17, 18, 19 才までと、44 才以上をそれぞれひ

とつのグループとし、更に 20~43 才を 3 才ご
とに刻んだ。これは統計上の対象者数の分布を
正規分布にする意味で行なったものである。

2. 皮膚の色

皮膚の色というのは、なかなか難しく、顔色
だけでは分らない。また最近のように若い女性
がいろんな形で日光浴をすると、これも分らな
くする理由になる。一番、決め手になるのはど
こかということを検討したところ、大腿内側の
そけい部に極めて近い内側ということになった。

色調の区分も非常に難しく、絵のときに使う
配色を基調にして、ここからここまでが白色、
ここからここまでが中間色、ここからここまで
が黒色というように分け、その点を採点して、
フジカラーと打合せたが、現実の色がなかなか出
せないことが分かった。結局は、自分の感覚に
頼る外はないということで、色見本を頼りに私
自身が測ることとした。

3. 肥満度

身長と体重を基準に考え、一般に言われてい
る標準体重で区分した。

4. 計測体位

外陰形態の変化というものは、体位によって
ことごとく変わってくるので基本体位を決めた。

(図 1)

5. 肛門形態

緊張している時と、弛緩している時とでは違
いがあるので、自然の状態で弛緩している形を
測った。

6. 臀部の下垂

一般に、お尻が垂れているということが、すなわちその体型が見苦しいというものではない。あるいは垂れてないから良いというものでもない。どういう形で脊椎とのかかわりを持っているかを見るべきものであり、骨盤の傾きとも関係があるので図-2のごとく角度を計測し、その角度で区分した。

日本人と欧米人を比較するとお尻が大きいとか小さいとかの問題ではなく、また扁平かどうかの問題でもない。横からみた曲線上の問題となる。これを複合的にまとめたものが表-1である。

7. 小陰唇

対称性・高さ・厚さ・長さ・形状・後端の形状について計測した。それから、着色の部位、着色の程度によって区分した。この着色の程度も、前述の皮膚の色と同様に残念ながらこの場でスライドをもってしても再現できない。

8. 大陰唇

これについては、下記の要因で区分した。

○厚さ — そけい部からの高さ。これも体位によって変るので、前述の図-1の体位で測っている。

○大陰唇の表皮の皺襞

○表皮の色素沈着

- ・陰毛発生部より狭い範囲で色素沈着しているもの。
- ・陰毛発生部と同じところに沈着しているもの。
- ・陰毛発生部より外側に色素沈着がのびているもの。

で区分した。更に色素沈着程度も繰り返しの観察に基づき区分した。

9. 陰核

Masters & Johnson にも詳しく書かれてあり、縦の径と横の径とは異なり、実際に大きくなる時には横の径が大きくなるということが述べられている。

よくこの話をする、非常に sensitive な部分であるので、一体全体計測できるのかという質問を受けるが、亀頭自体を測定するのは、非常に難しく包皮をまとめて測るようにした。

10. 陰毛

通常、教科書には、女性の場合、恥骨上縁又横指大体3~4cmの辺りで体の線に対して水平の線が描かれ、逆に臍の方に向って頂点をもつようであると男性形と称するというように書かれてあるが果たしてそうであろうか。体毛との区分も不明確である。

○発生形態（恥丘の部分は入れない）

次の5型に分類できる。

- ①逆三角形 ②長四辺形 ③台形 ④楕円形
⑤無毛

○陰毛の下端

- ・陰核周辺まで発毛しているもの
- ・後交連までいっているもの
- ・肛門までいっているが肛門の手前でとまっているもの
- ・肛門を超えているもの
- ・無毛である。

股間の解剖図を描くと図-3のようになる。この解剖図は開脚してはじめて分るものであって、Tanner & Marshallの陰毛の分類が立位で表わされていることに、私は疑問を持つ。

なお、陰毛発生の基本形態は図（写真）で供覧したとおりである。図-3'

○陰毛の色

日本人は本来黒色であると言われているが黒色一辺倒にはいかないのでこれを区分した。

○陰毛の性状

- ・縮毛が優勢
- ・直毛が優勢
- ・硬度（剛毛性・軟毛性）
- ・無毛性，無毛

に区分する。

○密度

測定部位は恥丘，陰核周辺，膣入口の高さ，そして密度は毛根の間隔が

- ・3mm以下——密
- ・3～5mm——中間
- ・5mm以上——疎

と区分した。

11. 膣入口

膣入口というのは点ではなくある拡がりをもっているのです，その中央部の存在を考え，図-4のごとく交点を求めて，その交点が・2cm以上前方，・2cm以上後方と分けて考えた。

また膣入口の露出度は，上述の体位のもとで，

- ・陰裂が明瞭でない程度に両側の小陰唇又は大陰唇によってふさがれているもの
- ・陰裂ははっきりするが，膣入口ははっきりした形でみえないもの
- ・両側の小陰唇は完全に離れ，膣入口，膣前庭が明らかとなるもの

に分けることができる。

以上の事項に関し，性交未経験者と性交経験者，分娩経験者（未婚者という言葉は不適當であり，性交経験の有無で分けた。性交経験はあるが分娩経験のない者は分娩予備軍といえよう）の各種の数値を比べてみよう。

全般的に数字の上からみると，性交経験を重

ね，更に分娩経験を加えた者ほど程度が増す傾向にある（しかし厳密に言えば特定個人を追って，1人の子供を出産したらどうか，2人目の子供の出産によってどう変化したか，を追跡しなければ断定できないのであるが，現実問題としてこれは不可能である）。

個別についていえば

○小陰唇の対称性

性交未経験者と分娩経験者との間で数値上差がない。

○小陰唇の高さ

分娩未経験者が圧倒的に低い。Masters & Johnsonは，小陰唇の役割を性交の場合にPenisをくるむものとしており，従って性交経験を重ねれば，小陰唇の高さも段々高くなるのだと述べているが，数字の上でその変化をとらえればそういうことになる。

○小陰唇の長さ

7,981例について小陰唇の長さを例えば5cmで切ってみると，5cm未満は性交未経験者では60%を越えるが，分娩経験者では25%に過ぎない。分娩経験と共に小陰唇の長さは増す傾向にある。

○小陰唇の形状（離散型か，融合型か）

性交未経験者では両者の比率は50対50であるが，分娩経験者（帝王切開を除く）では7対3で融合型が多い。

引き続き7,981例についてコンピューターに計算させた相関表（表-2）について説明すると，ここに書かれている数字はそれぞれ項目の相関を表わし，例えば数字4は $p \leq 0.0001$ を意味し，10,000人をとって外れるのはせいぜい1名位であろうと推定される，ということである。他の数字についても同様に理解してほしい。そして厳格なようだが，この表において少なくとも

も1から3までは有意な相関関係はないと考えてよいと思う。

最後にオルガスムにおける女性の性器の状態について述べてみたい。

これに関して Masters & Johnsonの本にも記されている。しかしわが国ではこのような症例を得ることは極めて困難なことであるが、幸い協力してくれる女性がいたので、私自身実際に行なってみた例を示す。

第一は性交未経験者

まず最初に性的な空想をさせる。すなわちエロチック・ファンタジーを自分で描かせ、その場合に性器の状態がどう変化するか見た。

・クリトリス：上方に上る

・大陰唇：膨隆する

・小陰唇：前方に突出する

そして陰核包皮の下端と小陰唇の間の亀裂がはっきりと分れる

・膣入口より分泌物が流れ出す

(性交未経験者であるので、クスコは使用せず) 正に, Masters & Johnsonのいうような resolution が起り, これが果して同一人物かと思うような変化が出現する。

第二例も同じく性交未経験者

これも第一の症例と同様な変化が起る。

第三は主婦(ご主人の協力を得た)

性交未経験と同じ変化が起った。

以上の症例で Masters & Johnsonと若干違うところは, Masters & Johnsonには小陰唇が興奮によって赤らむ, すなわち, スキンフラッシュが起ると書いているが, 日本人の場合には, そのようにはならないという点である。

以上

(昭和62年10月4日 第17回性治療研修会講演要旨)

参 考 文 献

Marshall, W. A. and Tanner, J. M. :

Arch Dis Child. 44 ; 291, 1969

石川信男：日本婦人の外陰部計測 近産婦誌第5巻, 138頁 1921(大正10年)

平手清忠：本邦女子陰裂長軸計測の統計的観察 大阪医新誌 11巻 807頁 1940

西崎省三：本邦健常未妊婦標準皮膚着色に就て 近畿婦誌 12巻5号 871頁 1929

杉立義一：女性陰毛発生状態の類型的観察

日本法医学雑誌 13巻2号 313頁 1959

中野一義：女性陰毛についての観察 産婦世界 第7巻8号 33頁 1955

牧美須磨：産婦人科領域における形態学的研究 特に鹿児島婦人の形質について 第2篇 外陰部諸径について 鹿児島医学・32巻 1423頁 1951

笠井寛司：経腔分娩が与える体形ならびに外陰形態への影響 京滋母衛誌 3巻2号 3頁 1982

飯島尚：日本婦人外陰部の解剖学的研究(1, 2, 3) 近畿婦誌 5巻11号 7巻2号 8巻1号 1923-1925

Masters, W. H. and Jahnson, U. E. : Human Sexual Response, Little, Brown and Co. Boston, 1966

Dickinson, R. L. : Atlas of Human Sex Anatomy Jason Aronson, 1930.

石浜淳美：臨床性医学入門 金原出版 東京 1981

〔著書〕

笠井寛司：名器の科学 ごま書房 1986

笠井寛司：ヒップと女性の科学 講談社 1987

笠井寛司：性教育の手引き 滋賀県教育委員会

”：房中術入門 ごま書房 1987

編 1985

他

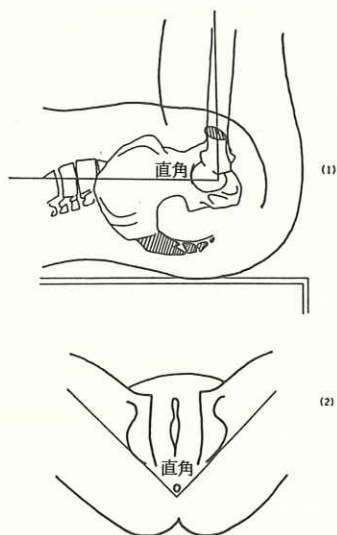


図-1 外陰計測時の姿勢

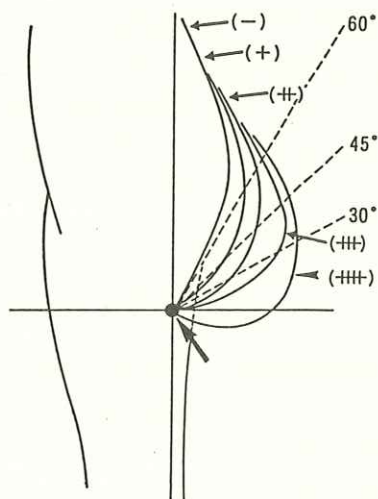


図-2 Slackening of the Hip

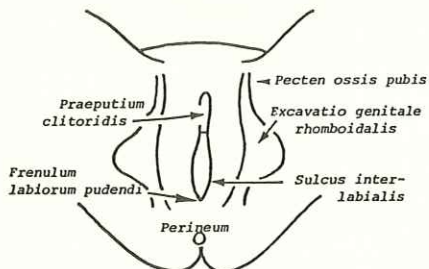
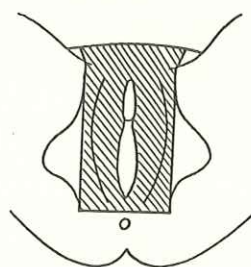
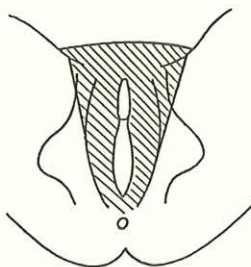
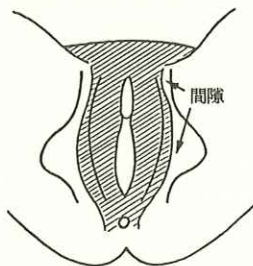


図-3

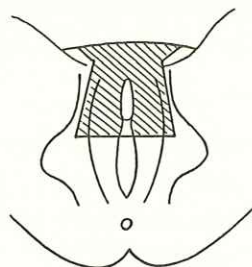
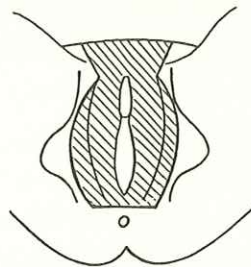


図-3'



広汎性子宮全摘術後の腔再建に関する 臨床的並びに組織学的検討

北海道大学産婦人科 大久保 仁

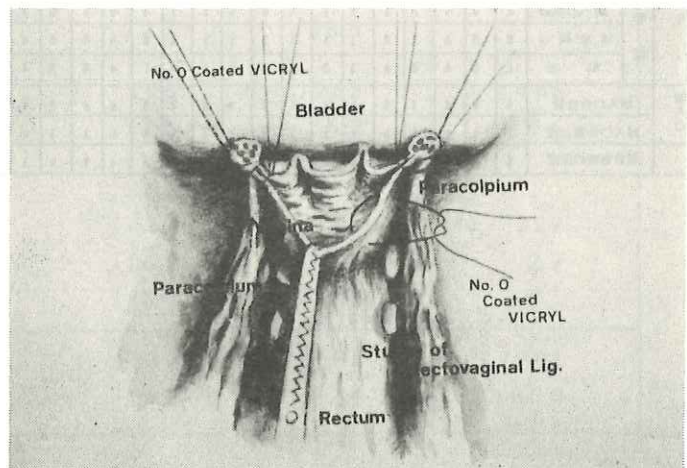
始めに本研究の目的を述べる。

子宮ガンの根治手術である広汎性子宮全摘出による生体臓器の機能障害は、尿路系では神経因性膀胱など、内分泌系では卵巢摘出による卵巢欠落症状、脈管系で特に問題とされているのはリンパ浮腫、それから性交障害などが術後患者を苦しめている。子宮ガンの根治性を損わずにこれらの問題を解決しようという試みは、以前より偉大な先人達によって行なわれてきた。北大でも、子宮ガンにおける卵巢機能保存と共に、広汎手術後の腔の短縮防止、腔の再建にも積極的に取り組んできた。今回は性交障害防止のための腔短縮防止の臨床的な有用性を検討したので、その結果を中心に話を進めたい。しかし、性交障害といっても大変漠然としているが、腔の短少化を見ようということで腔の長さを測り、それから腔液が減少するだろうということで、腔の内容物の量を測定した。もちろんそれだけで、性のすべてを論ずることはできないと思うが、その生物学的な現象の一側面について観察した点を理解いただきたい。

広汎性子宮全摘出というのは、腔をガンの浸潤に合わせて任意の範囲で切断することが主な目的の1つである。極端な例は腔を全部とってしまうこともある。そこで術後、

腔の短縮防止の為に、私どもがどういう工夫をしているかを示したのが図-1である。まず、腔の断端部を解放性に縫合し、腔を閉鎖しない。次に、経腔ドレーンを長期に交換留置するが、これも断端を閉じないようにしておく為である。それから断端深部の空間を機械的に圧伸する。さらにプロテーゼ等の装着、あるいは性交の早期開始の奨励などが工夫の内容である。

次に断端奥の空間の組織学的変化を、時間の経過で見てみると、術後5日目位では、豊富な脈管と、炎症性の細胞浸潤があつて、いわゆる肉芽組織を形成し、全く腔の形態をなしていない。ところが、術後2週間位になると、この断端奥の空間に向つて、ヨード染色陽性のグリコーゲンを含んだ扁平上皮が、おおってくる。これを組織学的に見ると、間質はまだ未熟で、どちらかといえば肉芽に近いが、



それに誘導されて上皮がおおってくる像が見られる。それで、大体術後1ヶ月ないしおそくとも2ヶ月位経つと断端奥の空間は、ヨード染色が陽性の上皮にほぼおおわれるようになる。これをこの組織で見ると、間質は炎症がとれて殆んど正常に近い腔粘膜固有層となり、エラスチカワーギンソン法染色では茶色ぼく染った弾性繊維が多数みられる。腔粘膜固有層は、弾性繊維が豊富だということが一般的に言われているが、再建した腔の間質もやはり弾性繊維が豊富な正常な腔粘膜を形成している。術後の入院期間は、放射線をかけなければ1ヶ月半から2ヶ月、放射線をかければさらに1ヶ月半くらいプラスになるが、入院中は毎日腔鏡を挿入し、断端部奥の新しくできた腔を圧伸して、腔腔長を保つように処置する。退院時には夫と患者に性行為をできるだけ早く開始するように指導している。ただし、夫のいない患者や、夫がいてもいろいろな条件によって、早期に性交ができない場合は、長さが7~8cmのプロテーゼを装着してもらおう。

このようにして術後4ヶ月位たった再生した腔の肉眼像では、腔特有の皺襞が見られ、また乳白色の腔液が認められ、ほぼ生理的な状態に戻っており、性交にも何らの障害がないと考えられる。

次にこのような工夫が、臨床上的どの程度有用性があるのかをみるために腔の長さを測定した。対象は広汎手術と単純子宮全摘を行った婦人、354名である。外来通院時に、腔断端から後腔入口部までの長さを腔鏡を挿入した状態で、圧縮せずに測定した。結果は図-2に示した。まず手術の術式と腔長の関係であるが、腔を長くとらない単純子宮全摘で、腔式および腹式では何れも平均7.2cm、次に広汎性子宮全摘術をし

Methods of hysterectomy and postoperative vaginal length

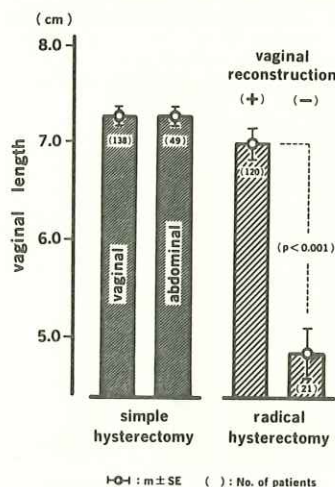


図-2

て、そのあとに腔の短縮防止法を施行した群では大体7cmと、単純子宮全摘とほぼ変わらない位の腔の長さがあった。しかし、短縮防止法を施行しなかった例、例えば、腔断端を閉鎖した例、あるいは、腔は開放性にしたが、そのあとの圧伸開大などの工夫をしなかった群では、平均5cm位で有意に腔の短縮がみられた。この結果から短縮防止法は、有用な方法であると言えると思う。

次に、広汎手術をして短縮防止法をした例を卵巣を保存した群と保存しなかった群とにわけて腔長を比較した。年齢は50才未満の患者だけに限った。なお卵巣を保存した群を、卵巣をそのままの位置に残した群と卵巣を移動して残した群とに分けて検討した。(北大では、若い人の頸部扁平上皮ガンで、放射線照射を予想される場合には、血管をつけたまま側腹部に卵巣を移動する)。図-3に示すように卵巣を残した

Influence of ovarian preservation
on the length of neovagina

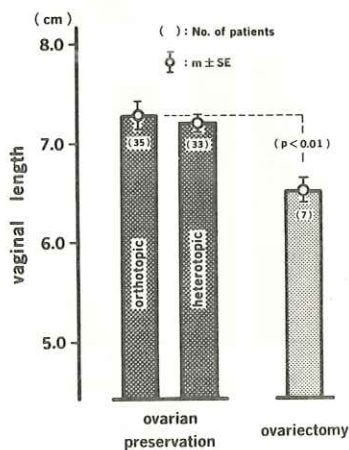


図-3

群では、膣の長さが平均 7.1 ~ 7.2 cm 位であるが、卵巣を摘出した群では平均 6.5 cm で有意に短縮していた。すなわち卵巣の保存は膣の再生に重要な影響を与えていると推測される。

次は、両側卵巣を摘除した例にエストロジェンを補充した場合の膣長を検討した。卵巣摘除例をエストロジェン（主にプレマリン）服用群と非服用群に分け、卵巣保存群の膣長と比較した。エストロジェンを補充すれば、大体同じ位の長さになるのではないかと予想していたのであるが、（図-4に示すように）卵巣を保存した群よりは、推計学的には短縮しており、エストロジェンだけでは代償し得ないということが予測される。さらに年齢差を補正するために49才以下と50才以上に分けてみたが、エストロジェンを連用しても連用しなくても、49才以下だろうと50才以上であろうと、差はなく、年令的な要因は除外されるということが分った。

Influence of ovarian preservation
and estrogen (E) administration
on the neovaginal length

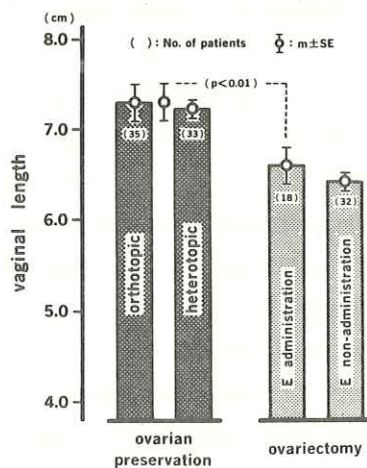


図-4

次に、卵巣を保存した群と摘除した群とで、膣断端奥の空間がヨード染色陽性の上皮でおおわれ、膣粘膜の再生がほぼ完成するまでの期間の平均をとってみた。そうすると、卵巣を保存した群では、大体40日位で、ほぼ膣が再生した。卵巣を摘除した群では50日以上かかり、両者に明らかに有意差があった。卵巣を保存するということは、膣の再生する期間も短縮すると考えられた。（図-5）

次に、放射線の照射の影響について検討した。放射線には、外照射と腔内照射とがあるが、腔内照射は、当然大きな影響を与えると考えられるので除外し、外照射施行例のみに限った。広汎を行って、短縮防止法をして、しかも、卵巣を残した例の中で、放射線をかけなかった群とかけた群の膣長を比較したところ、図-6に示すように両者に有意差はない。実際に、膣再生過程を観察すると、放射線照射例のほうが膣再生完了ま

Influence of preserved ovarian functions into the period completing epithelial regeneration

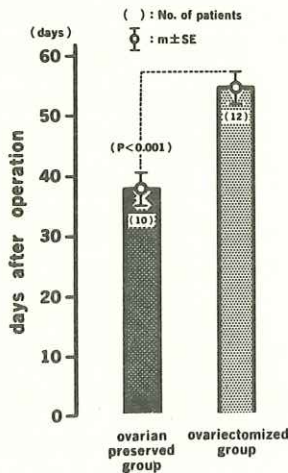


図-5

での期間が長いことは確実であるが、最終的には、腔腔長の復元には影響はないということがわかった。

次に、広汎手術における短縮防止法を実施し、臨床的有用性を確認した最も典型的な症例を紹介する。患者は34才の主婦。子宮頸ガンのⅢa型で、腫瘍が腔の下 $\frac{2}{3}$ をこえ

ており、やむを得ず、前庭部だけ残して、腔をほぼ全摘した。術後早期にプロテーゼを装着し、前述した腔短縮防止法を行ないつつ粘膜の再生を計った。腔粘膜の再生は、通常の広汎手術では2週間位から始まるのであるが、この例では、腔前庭部のみ残存しているためか、大体4週間位から再生が始まり、急速にヨー

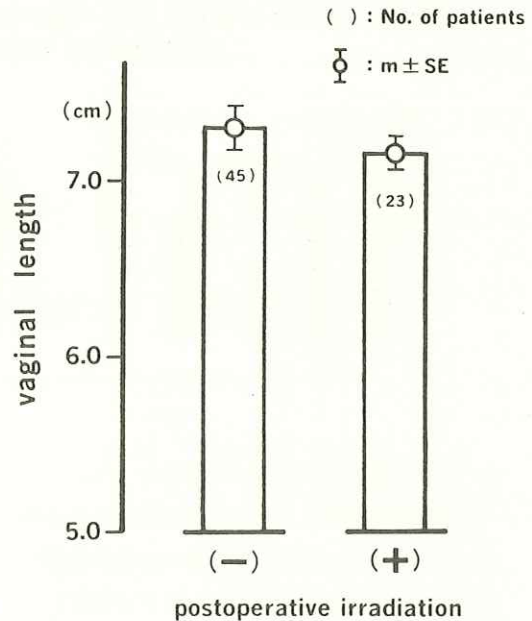


図-6

ド染色陽性部位が広がってきた。術後2ヶ月位で、放射線を照射を開始したところ、再生が遅延したが照射終了後150日目頃から再び再生が始り、230日目には、ほぼ正常に近い8cmの腔壁となった。(図-7)生体で、大部分欠損した組織が、ほぼ生理的な状態にまで再生すると

Regeneration of vaginal wall in the case of total vaginal exenteration

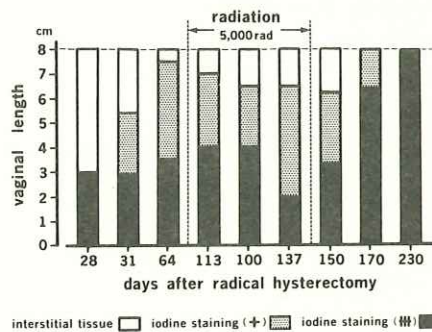


図-7

Mechanism of vaginal wall regeneration after radical hysterectomy

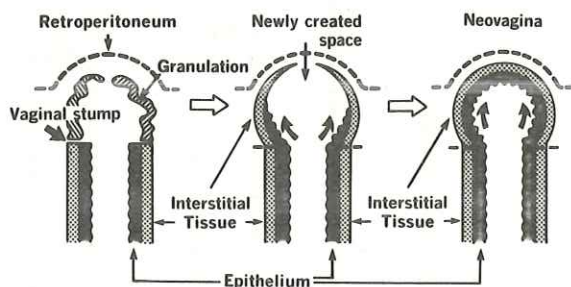


図-8

いう現象を観察出来、大変興味深かった。

この腔の再生のメカニズムを次のように考えている。広汎手術後の腔断端奥に空間を確保しておく、まず肉芽が形成されそれが間質として次第に成熟しそれに沿って、上皮が再生する。

(図-8)

子宮ガンの根治手術である広汎性子宮全摘には様々な機能障害が発生するが、子宮ガンの治

ゆ率が上昇すればする程、機能障害対策が求められるようになる。例えばセックスに関しても、最近では夫と性行為がうまくいかないというようなことを、実際に訴えて来る患者が非常にふえてきたように思う。私共は、広汎手術に際して、根治性をそこなうことなく、短縮を防止する方法を実施してきたが、幸いにして、満足する結果を得ることがで

きた。最近では、患者の退院時に、夫と共に面接して、広汎性子宮全摘術によって性行為がうまくいかないことは決してないということを、医者立場として力説できるようになったというのが大きな収獲であったと考えている。

(昭和62年10月4日 第17回性治療研修会
講演要旨)

症 例 研 究

J A S C T カウンセリング室が実質的に治療活動を始めてから今年で5年目を迎えた。その間当相談室では、約350人の患者さん達の悩みに答えるべく日々努力をしてきた。そして私達カウンセリングスタッフは更にカウンセリング内容の充実を志し、1昨年61年度から原則として2ヶ月に1回症例検討会をおこなっている。

今回は3人のカウンセラーそれぞれがその症例検討会に出したケースのうちの1つをここに掲載した。

症例 I

ワギニスムスの症例(1986. 9 提出)

日赤医療センター 金子 和子

○ K.K. 26才 (水戸在住)

初診 1983. 11. 2

生訴 未完成婚(本人のワギニスムスによる)

1979. 10に恋愛結婚、初夜にこわくて出来なかった。夫は段々に慣れれば良いと、無理強はしなかった。はじめの2年間位は週に2~3回の努力。1年位で指で性器をふれてもらおうと気持良いようになったがその後変化ない。3年目の時に一度うまくいきそうで少し入ったが痛くてだめ。恐くなり出した。本をみて、鏡で見た指をトライして2節位入ったがそれ以上進まず困っていた。現在週1~2回のトライ。夫は勃起、射精ともに問題ない。

初潮 小4 10才 なった時、まだ生理について知らず、母に云った。生理障害なし。

マスターベーション 体験なし

家族関係 ○夫と二人暮らし。父—ワンマン。

結婚前は厳格、まじめ、几帳面。

○母—几帳面すぎる位まじめ。手ぬきなし。

○姉(32才)—活発、自分と対照的。自分は姉より大事にされたかも。姉は親に反発。自分はすなおすぎ?

父母の仲—父が気むずかしく母が大変。ああいう結婚はしないと父と反対の人を探していた。

○自分—人にまじめと云われるが自分では頑固と思う。甘ったれで明るいともいわれるが、そうじゃない面も。緊張タイプではなかったのでこの問題で自分でもビックリ。

○夫—気が長くて優しい。反面頼りないような。父を見ていたから家事をしてくれるとうも…。2人は仲が良いと人には云われるが、こうなると本当には打ちとけていないのじゃないかと思う事もある。

第一期 診察ができるまで。(1983. 11. 2~1984. 4. 4まで。第1回セッション~第8回まで)

この時期の来所は約2週に1回の割合である。セッションは、毎回、本人と相談してできそうだという宿題を出して次回にその検討を行い、又次の宿題を決めるという形で進んでいった。この時期は来所のたびに自律訓練の公式はふえるし、映画をみたり、実際の練習の課題がでたりで、かなりメリハリのある時期である。本人は新しい事をはじめた初頭緊張で張りきっており、熱心に練習にとり組み、その効果も顕著で、大変喜んでいてた。

この時期に出した実際の練習の宿題は次の通りである。①鏡で性器を4回見る。②性器をさわらぬタッチング。(1人で。夫と2人で)③自分の指の挿入、④綿棒の挿入、⑤タンポンの挿入、⑥夫に綿棒を挿入してもらう。等である。自律訓練は基本公式を終え、主観的不安得点表をつくり一般項目の脱感作を始めた。

実際の練習のうち①、④、⑥はできて本人も大変気が楽になった。しかし③の指の挿入、⑤のタンポンの挿入はできていない。毎回本人と相談して、できそうという事で宿題を出す訳だが、本人ははりきりすぎて、希望と自分の現実の姿が乖離してしまっていて、できる以上の事をできそうだと引受けてしまう事が多かった。引き受けても、練習する気になれなかったり、練習時に体がこわばったり心臓がドキドキしたりして練習できないのである。こうした背のび自体がK.Kの特徴でもあるので、できなかった時は困難度を下げて出したり、間をおいて出したりしたので、結局、自分の指を挿入というのは、手を性器に当てる、タンポンは、時々みてなれるという形から入る事になった。

回を重ねるにつれ自然に心の内を語るようになり、父母や夫について多く語った。この時期の終り頃に「性器が傷口という感じでさわりに

くくなってきたが、妊娠しても医者にかかれな
いのでは困る」と述べたので診察をすすめた。
初診時、診察をすすめても頑として同意しな
かったが、この時はすぐに同意した。次回にキ
ンロカインジェリを使ってではあるが内診が
できた。本人は大変喜び、問題が全て解決した
かのよう受けとった。

第二期 タンボンが入るまで。(1984.4.24—
1984.8.13まで。第9回～第14回まで)

内診ができて大変安心し、気持が明るくな
ったのでゆとりがでたのだろうか、父母の関
係をみつめ直したり、自分の性格をふり返る
ようになった。父母がよく喧嘩をしていたの
で男の人は恐いな—という気持がどうしても
ある事、父は父の母が自由奔放で男女関係
が激しかったので女性への気持が素直でな
く妻に対しても猜疑心が強い事、そのため、
母が5時以後に家をあける事は、PTAの
会合であろうとも許さず、母は本人の姉
のついで先へも泊った事がない事、父が娘
を叱っていると急に祖母の悪口になっ
てしまう事等が語られた。又来所前から、
よくへビの夢をみたが、内診が終って
みなくなったという報告もした。内的な
話の比重がふえ、問題の核心に近づいて
くるが、現実的な練習は第一期ほど進
まず本人はあせり出した。

自分の指の方が夫の指やタンボンよりも
楽そうというので宿題に出すが、できず、
ではとタンボンに挑戦してみるがやはり
できないというのが繰り返えされ、本人
は次第にいらつき出す。セラピストは、
今は内的な事を掘り下げる時期なのだから
現実的な事は進まないでも良いからと夢
の報告をすすめる。しかしK.Kはやはり
現実的に進んでいるという実感が欲しく
て、ある時、夫に向って爆発する。「何で
上手く行かな

いのかなー」と夫に云ったところ、「行動あるのみ」と夫は明るくいった。K.Kは「私の気持ちをわかってくれない!!」と激しい言葉をたたきつけ、びっくりする夫を尻目に実家へ帰ってしまった。そこで、初めて母に婦人科へ行っている事を告げるが、具体的な事をK.Kは云わないので、母は「そんなの悩みの内に入らない」と答える。K.Kは感情が抑えられなくなり泣き叫んでしまう。両親はびっくりしなだめてくれた。よく日、K.Kはもう少し実家に居たかったが、母が送ってきてくれ、はじめて家をあけてK.K宅へ泊ってくれた。この事から、親に甘えた事のなかった自分、いつもいい子だった自分、いつも感情を抑えていた自分が見えてきて、それらが本心ではなかったのではないかと気づく事になる。

その時期の夢として次の夢を報告した。「バスに1人で乗っている。他の乗客は皆気持の悪いロウ人形かプロレスラーみたいな人で、クルッと自分の方を向くと皆同じ顔。自分はクルッと向いた4人をポンポンぶってスカッとする。母のような味方が1人いるが母でないかもしれない。他は妖怪、目ざめて、よくバスから降りなかったなーと我ながら感心した。いつも逃げている私なのに」この夢の後、タンボンが入るようになり、気持も少し落ち着いた。淋しがると夫がなぐさめてくれるようになり、なぐさめられる心地よさをおぼえたとの事だった。

第三期 拡張器№6を夫に入れてもらえるようになるまで。(1984.9.3~1984.12.27 第15回~第20回まで)

タンボンが入った直後に不思議なように自分の指も楽に入るようになった。そして拡張器№4(白いプラスチックの練習用の棒で太さに6

段階あるが、殆んど人の場合タンボンより若干太い№4から入る。この器具は現在は改良されてタンボンより少し太いサイズから4サイズある)もできた。又現実的な練習は進み出し№5もできるようになり夫の指も入るようになり出産への不安も減った。一方、夫への不満が出だし、もっと明るく楽しい人と結婚した方が人生は楽しいのではないかと思う事もしばしばだった。しかし、そうした不満は、K.Kの変化に伴う一時的なもので、やがて夫の良さをしみじみと有難く思うようになっていく。

そして拡張器№6(直径25.5mm, 周囲80mm)ができる頃になると、自分の性器を体の一部と実感できるようになる。また、「この問題は一つの心身症で、生きて来たもろもろのものがずうっとあってこうなったのだ。親を非難する訳ではないが、育ち方から生れたのだと思う」と述べるようになる。そして「この問題にぶつかって良かったのかもしれない。前のままだと、子供が子供を生むみたいな事になっただろう」とも。

第四期 挿入成功まで。(1985.1.17~6.30 第21回~26回まで)

実際の練習はいよいよペニスの挿入練習の段階に入ったが、なかなかかはかばかしくはすすまなかった。K.Kは「ここまで乗りこえて来たから、この先ものりこえられる」という自信が芽生えてきた一方で、ペニスの練習が嫌だという気持も強くなり、本当に大丈夫だろうかとの不安も強まった。セラピストは「新しい自分へ変る事は、例え良い方向へであれ不安なものであり、従来の体制が崩れつつある時はつらいもので今がその時期だから」と励ましつつ、K.Kの夢の世界にゆっくりつきあう事にする。これま

での内的調和が崩れて新しい統合をもとめている時は夢をみる事が多いしその夢は意義深いからである。

この時期に、「夫とセックスをしている夢」をみた後、「地下室にもう一人の女性といる。出口に浮浪者のような汚い人がいて出られない。少し明るい方へ行きそこのドアを開けると中はねずみが一杯。あわてて閉めるとまたバーと地下室」という夢や「学校の渡り廊下に注射器がポツポツ捨ててある。もう一人の友人と、覚せい剤を打ったあとだと、こわくてトイレにひそむ。トイレで手を洗って目ざめた」というような、男性や性的なものを混沌とした恐怖としてとらえている夢をみている。その後「黒人が近よってきて体をさわる」「ヘビの様な魚のようなものが土の中から出てくる。自分にはグロテスクであるがもう一人の女の人が平気でさわっている」「夜道を一人で歩いていて前方から小学生位の男の子がくる。その子はもう少し行くと明るくなると云ってくれUターンして一緒に歩いてくれる。パッと明るくなり住宅街にでた」という様に次第に男性的なものへ接近してゆく。この問題から逃げだしたい気持と、とりくもうという二つの気持は、「自分ともう一人の女性といて、体をしいたげられている。一人はついに逃げだす。逃げちゃだめと自分はおいかけますが、いつのまにか二人で逃げている。追手がきたので体に風船をつけて空へ逃げる」という夢に端的に表われている。

この間に、イメージ療法で用いられるイメージの脱感作という技法からヒントをえて、夢の中の恐怖感や不安定さを脱感作していった。そして体をしいたげられている夢を報告した日、K.Kの従妹が、K.Kの結婚して3ヶ月の時、痴漢に道で襲われて殺されたという話をした。こ

の事についてK.Kは「話していませんでしたか?」と不思議そうであった。

この次のセッションでは亀頭の一部が女性上位で挿入できたかその後体調を著しく崩したと報告した。そして夢はついに最終段階を迎える。「ネッシーのような大蛇が沼にいます。自分は恐がっているが2・3才の男の子が大丈夫という。子供が大蛇の首に輪をかけると蛇は小さくなった。」「玄関のベルを誰かが押す、あけても誰もいないが、閉めると又ベル。鍵は閉めた筈なのにこっちへ押してくる。よくみると小さい男の子が立って笑っていてホッとした。」その後夢はパタリとみなくなり次回に挿入に成功し、妊娠したかもしれないと報告した。

この時期では、男性の悪いイメージの元となった父に対する恐りは消え、そうした父から自分達をかばってくれなかった母への恐りが意識化された。母がよき女性のモデルでなく、自分の中に女性らしさ、母親らしさの育っていない事と、この性的な問題との関連にうっすらと気付き出した頃、ペニスの挿入に成功し、すぐに妊娠したのだ。セラピストは母への恨みが十分にいやされていない時期の妊娠は少々早すぎるのではないかと不安を抱いた。

第五期 流産から本人の安定まで。(1985.7.22～1985.12.25. 第27回～31回終了まで)

妊娠したかもしれないという報告のあと、妊娠の確定までは毎日のように電話があった。確定してからは電話は無くなったので一安心していると、次回の報告は、階段から落ち出血して、手当をしたが、やはり無理との事でそうはしたとの事だった。大変がっかりしており、話しながらも涙が止らない。しかしセラピストは、手術後母が泊りがけで看護してくれたり、不安に

なるとなぐさめてくれた事や次のような夢の報告をきいて、むしろ嬉しい気持ちになった。「手術後2日位してみた夢。白い着物のおじいさんがでてきて、光線をビーとだす。“あそこの水を飲めばいやされる”という。私の実家の方の水だった。」「手術後10日位してみた夢。デパートへ女の人と二人で行く。人体のマネキンがゴロゴロ。それが突然動き出す。あるいは、お屋敷で、女の人がいると思うと、着物をきた等身大の人形。それが急に動き出した。こんなの3回位続けてみた」セラピストは、母の行動や夢から、母との和解が成立した事をしり、命をふきこまれ動き出した女性というイメージを抱いた。

現実的には医者に妊娠を3ヶ月間止められ、ベティングしか行わない時期が約5ヶ月続いた。この時期、生理はもどったが、基礎体温はみだれ、体調も悪く、気分的にも不安定であった。もう子供はできないのではないかと、自分を変ったと思っていたが、変っていないのではないかと等々、毎回の面接でセラピストの「大丈夫よ」という保証を極度に欲しがった。些細な事で医者に行き、いちいち医者の言葉が気になって、次のセッションがまち切れずに電話して来る事も多かった。しかし、そうした電話にいてねいに応じているうちに本人も落ちついてきて、10月には子供をオンブしている夢をみた。11月

には高温期もでだし、12月には、又ベニスの挿入が可能になり体調もよくなった。そして「これまで治るのが目的でそればかり考えていた。治るとボカッとはりがなくなった」と、述べてアルバイトを始めた。又、「子供、子供と思いつめていたが、子供で自分が変わるものじゃないと思えだしてきた。すごく子供による変化に期待していたがそれが薄らいだ。今は自然な期待」とも述べた。K.K.がこうした心境に立てたので、しばらく様子をみようという形で、セラピーを休む事(終る)になった。

1986.2 に電話で妊娠の報告があった。セラピーを休む(終る)事にした後すぐ妊娠したのが不思議だという。

1986.7.12 大きくなったおなかをセラピストにぜひみてもらいたいとわざわざやってきた時は、セックスも大変自然になったとの事であった。

ケース検討会提出後、1987.1 に、1986.10 に女兒を無事出産したとの報告があった。K.K.は「本当に案ずるよりは生むが安し。」ですねと笑っていた。

このケースは“性障害患者へのカウンセリングとケア”ベリネイタルケア増刊号、通巻58号、メディカ出版、1987.7 に一部引用しました。

症 例 Ⅱ

症 例

JASCTカウンセリング部 渡 辺 景 子

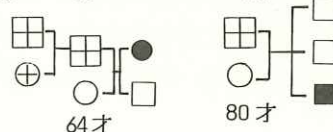
妻；A子(43才)大学非常勤講師

夫；(45才)会社員

<主訴>性嫌悪、性交痛、未完成婚

<家族構成> 妻

夫



同居家族；妻，夫の2人

<結婚歴>

S 48 見合結婚

妻 29才 夫 31才 2人とも初婚。

<面接経過>

第Ⅰ期 61.9（初回）～62.1

月2回の面接（計10回）

第Ⅱ期 62.9（再開）～62.12

月2回の面接（計7回）

（第Ⅲ期）63.2からの予定

第Ⅰ期

2人は見合結婚。A子は結婚前友達から「セックスは痛いものだ」ときいていたので、初夜は緊張して出来なかったという。旅行から帰ってから何度か挿入を試みたが痛みが強くて出来ず、又子供もまだほしくないとの思いもあったという。結婚後しばらくするとA子から拒否するようになり、未完成婚のまま13年を経過していた。

初期には夫から離婚を口にされ、A子も自信をなくして悩んできた。しかし性について他人に話すことには抵抗があり、又お互い仕事も忙しくここまでできてしまったという。最近夫はなんとか2人でがんばってみようとはいうものの、どうしてよいかわからず、又夫の仕事は忙しくてゆっくりする時間も少ない。一方A子は性の問題や身体への不安・仕事上のゆきづまりなどが重なり、それまでの仕事もやめてしまっていた。

来所のきっかけになったのは、夫の健保組合の雑誌で未完成婚の記事をみてという。A子は自分以外にもこんな問題をかかえている人がいることを初めて知り、又そのような相談機関があることに驚き、不安ながらも日赤に電話をし

てJASCTを紹介されたのであった。

初回A子は、性のことを公にするのはとんでもないという夫には内緒でひとり来所。細い身体つきで地味な感じのA子は、緊張気味で視線があちこちと移り落ち着かなかった。しかしこれまでの長い経過を一通り話すと、少しほっとした様子であった。A子の話から今回来所のもう1つの動機は、年齢を増すごとに癌への不安感が強まってきた為と思われた。A子は35才時市の子宮癌検診をうけ、その際恐がったら「結婚しているのにー」とナースに何げなく笑われたことにひどく傷ついた経験をもっていた。それ以来、婦人科へ何度か電話をしたが、恐くて行けなかったという。A子はもう内診をうけられないとの思いでいた為、癌になっても検査もできないと不安を強めていったようである。

治療者はA子のそのような不安をうけ入れた上で性に関する情報を伝え、まずは身体的チェックを勧めた。すると次回には紹介した日赤医療センターに予約をとり、長年行けなかった産婦人科外来を訪れた。そしてA子の不安を理解する医師とカウンセラーのやさしい励ましにより、ようやく内診をうけることが出来てほっとしたと強調して語った。身体的問題は特になかった。

治療者は元々身体がかたくてリラックス出来ないというA子に、自律訓練とタッチングからはじめた。しかしA子は頭でわかっていても、身体がガンコでいうことをきかないと訴え、又仕事はないが家事などで忙しいことを理由に行動療法はなかなかすすまなかった。夫にもカウンセリングのことは言い出せずA子自身にも焦りがみられたが、治療者はゆっくりでもいいからA子のペースでやっていこうと話し合った。

このような中でA子は、なぜ自分がこれほど

までに性を嫌うのかを少しずつ考え、祖母・父・夫との関係などを語っていった。

A子の父は神経質で病弱であり、A子が3才時に死亡。母は26才で2人の子供をかかえて職もなく、父方祖母の強い要求もありそのまま同居していた。祖母は気性の激しい人で、子供たちが泣くとよく母をしかった。A子からみた母の姿はみじめであり、母のような結婚を嫌だと思った。母もA子にはよく、好きなことをやるようにと言っていた。そしてA子自身、全体的にやさしい感じの夫を見合で選び、結婚後もA子なりの生き方を仕事に求めてがんばってきた。一方、夫も仕事一筋で人付き合いは少なく、楽しみはテレビ位。A子はそんな夫がかわいそうな気もして義務感でセックスをーと思ってきたという。又A子が性を楽しめないのは、小学校2年生から高校までのカトリック系の学校でうけてきた教育の影響も強いという。

自分の身体の一部であるのにどうしても性器だけは特別の場所のようで、見ることもさわることも恐いというA子に、治療者は日赤医療センターでの治療用映画を勧めてみると、ひとりで見にいった。その感想として夫と結婚初期に見たブルーフィルムは動物的でグロテスクな感じで嫌だったが、これはキレイな感じで自分の身体を知ること参考になったと語った。しかしA子にとって自分の身体・性器を鏡で見たりさわったりしてみることは、まだ難しいことのようにであった。

この頃A子は、小さい時から父に似て身体を動かすことが苦手で学校でもよく怒られ、自分の身体に自信がもてなかったことについて語った。そして東京女子医大で心臓や眼の検査をうけたり、手足が冷たいと近くの内科を受診したりして1ヶ所ずつ自分の身体を確認しているよ

うであった。これまでに大きな身体的問題はみられなかった。

治療開始後4ヶ月を過ぎた頃、精神的には大分楽になってきたと語り、次回は忙しくなる為電話で予約をしたいと言ったまま久しく来所しなかった。

第Ⅱ期

その後8ヶ月たってからA子から予約の電話があり、再び来所。この間A子は夫の職場に近い住宅を購入して引越し、再び仕事をみつけて働き始めていた。再来後1ヶ月程して、夫にもカウンセリングのことを話すと驚いていたという。A子が夫と協力してやっていくにはもう少し時間がかかるだろうが、一歩踏み出したといえよう。

一方で癌検診を希望し、紹介状を持って日赤医療センターを受診。異常はなく一応安心したようであった。そしてこの後「タンポンを使ってみようかなー」というA子に、治療者はいっしょに本を見ながら挿入場所や使い方を説明した。

この頃A子は母のことに触れ、A子が若い頃理由もなく落ちこんで仕事等ができなかった時期があったが、その時じっと見守ってくれた母に感謝していると語り、その中で仕事に戻りこえてこれたという。そして今の母は何にでも興味をもって楽しそうで、尊敬できる人であると語った。A子の中での母親イメージも変化してきているようであった。

長い間この問題をひきずってきたA子の心の内には、もっと様々な思いがあるのだろうが、気持ちの上では少しずつ楽になってきているようであった。

しかしA子の身体への不安の異常な強さやこ

だわり、身体的練習ができなすぎること、若い時の“落ちこみ”というのが常識的レベルを逸脱しているように思えることなどから、治療者はA子に精神的問題がある事も疑われたので、JASCTの研修会に出して今後の関わり方を含めて検討し合った。そしてA子に風景構成法という絵画療法を施行し、その絵からA子の自我の強さや問題点を検討し治療の焦点をどこにおくかを再検討することで意見が一致した。一方でA子に今後身体的練習ができるようにするためには、課題を細かく分け与えていく中で、A子のペースをもうけ入れながら、いっしょに取

りくんでいくことではないかと話し合われた。

A子はその後1回来所。前から話していたように仕事が忙しい為2ヶ月の休みを前にして、A子の方からも自律訓練を再びやってみようとの思いが語られた。そして2ヶ月後の日時を予約して、明るい表情で帰っていった。

A子はこれから性的問題解決にむけて、実際の練習や訓練へとむかっていけるであろうか。

治療者としては第Ⅲ期に入る際に絵画療法をやってみて、その後の治療のすすめ方を再検討したいと思っている。

症例Ⅲ

62年9月の症例検討会から

JASCTカウンセリング部 堀 一 子

症例Ⅱ A夫、24才、独身、学生

＜主訴＞性倒錯：女性にではなく、女性の下着（パンスト、タイツ）に性欲を感じる。

＜家族＞両親、A夫、弟、母方祖父母。家業は母方祖父の代からの本屋。父は従業員から婿養子となる。父は良くも悪くも家族のもめ事に入らない人。祖父はもともとA夫には同居人としての印象しかない人。母は口うるさく、一度言い出したら絶対あとにひかない人。祖母は母親と同じ性格で母親の更に上手をいく人で母親もお手上げとのこと。弟（18才）は、中2の頃から登校拒否が始まり、そのまま中退。一時は状態が悪く自室にこもりっきりのこともあったが、今は落ち着いてきて、A夫と旅行やコンサートへ出かけられるまでになっている。

＜成育歴＞A夫が小学校に入る頃、本屋を拡張経営したいとする父は、母、祖母から猛反対を

受け、自宅近くに好きな料理の腕をいかしスナックを経営していて、夜中に帰宅する生活をしている。祖父はA夫が生まれる前から通勤に1時間かけて自分の所有するビルの管理に、サラリーマンのような生活をしている。小学校に入る頃までは大勢の従業員がいたが、今は店員が1人。母は店にかかりっきりで、掃除、洗濯しに通いのお手伝いさんが午前中だけ来る。食事の仕度は母が（A夫が子どもの頃は祖母がしていたが今は祖父母は全く別に食べている）やるが、祖母の時同様かなりの手抜き。家族がそろって食卓につくことは全くない。母親は、子ども達を有名校に入れることに異常に執着し、いやがる彼らを進学塾に通わせ、有名私立中学校に入れ、A夫は現在有名国立大に在学中。

＜現病歴＞3才頃からテレビをみていると、ドイツ姿のウルトラマンが怪獣にやられるシーン

になると興奮し、畳に性器をこすりつけていた。そのうち自分もウルトラマンのような服装をし、怪獣にやられる場面を想像してバツリ倒れて畳に性器をこすりつけるようになった。やがて興奮の対象はウルトラマンからウルトラマンと同じ役柄の女性に移っていった。小2の時、母のタンスからパンストを出してはいてみた。自分が女性になったつもりで鏡を見て想像すると最高に興奮した。中学生の頃までは週に1回位、母のパンストを身につけるか想像する程度だったが、高校生になると、ほとんど毎日。パンストも色・柄物がほしくなり、万引も何度かした。19才の時、だめでもともとと思い1度だけソープランドへ行った。裸の女性を見ても何も感じなかったが、手伝ってもらってなんとか正常なセックスができた。ここ1～2年は、パンストをはくのは1ヶ月に1回位に押さえることができているが、連想によるマスターベーションはほとんど毎日。苛々している時、寂しい時、むしろにはきたくなる。大学に入るまではずっと孤独だったが、大学に入って、中学生の頃通っていた塾の先生に誘われ、塾で教えるようになってから、その塾の人達といい関係ができ、そこでは気持ちが落ち着く。

＜今回来室の動機＞大学を卒業する年になったが、このまま社会に出てしまったら、この性癖がこのままもちこされ、将来結婚もできない人間になる。今でなければ治す時がないと、卒業をもう一年伸ばすことにして来室。

＜相談経過＞初回62年4月上旬、学校は単位をほぼ満たしてほとんど行かなくてよいので、今年は塾からの収入が安定していることもあって治療に専念したいと、週1度のカウンセリングを希望、その通り始まる。初回時のA夫の印象は、小柄で黒っぽい服装、髪は長めで目はほ

とんど前髪に隠れている。陰うつな表情ながら暗い鋭い目を時々カット見開いて治療者を見据え、苦しそうに息をつぎながら、今までの病歴の概要をほぼこの日のうちに話す。その様子から治療への並々ならぬ意欲を感じた。性相談を行なう時、通常治療者は精神療法的カウンセリングに自律訓練、脱感作等を並用するのだが、この日のA夫の言語表現力及び話したいことがいっぱいたまっている様子から、当面は精神療法中心に治療を進めることにした。

次からは初回ほどの重苦しさは次第にうすらいでいき、家庭の様子、特に母親のことが中心に話された。母親といい関係がもてなかったこと、この性癖・小さい頃から続いている寂しさは、母親がもっと優しく接してくれていたら違っていたかもしれないと語られ、治療者もそのあたりのこだわりに焦点をあてていきましょうと対応していった。

子どもの頃寂しい時に絵を書いていたという話がでていたので、3回目には絵を書いてみないかと誘った。同意が得られたので風景構成法で絵を書いてもらった。風景構成法を簡単に説明すると、画用紙にマジックで川・山・田・道・家・木・人・花・動物・石の順で書いてもらい、それに本人が加えたいものがあれば自由に書き加えクレヨンで仕上げる風景面で、書き終えてからその絵について簡単な説明を求める。A夫の絵は構成力のしっかりしているものであった。説明によると、人は20才過ぎの男性、家はその人のものだろう。動物はその辺にいるネコで、牛乳位はあげているだろうとのことであった。

ちょうど1ヶ月位した頃、A夫は髪を小ざっぱりと短かくして来室した。表情も柔かくなり、あれほど鋭かった目にも時折笑みがうかぶようになっていた。気がついてみると服装もこの頃

から明かるいものになっていった。その頃A夫は、自分の中にある母親のイメージをどう処理するかに苦慮しているようであった。大学へ入るまで、母親のひいた路線をひた走りながら、他に目を向けなければまずいんじゃないかと思いつつも向けないできて、本も読まずスポーツもせずアンバランスな人間になってしまった。それでも塾では先生も生徒も暖かくうけ入れてくれ、少しずつ気持ちがふくらんでくる。しかし今まだ自分には母親を許せるだけの度量がない。それは人に与えられるものを持っている人のやれること、優しくしてもらった経験のない自分は優しくしてあげる方法がわからない、と、もがいていた。そして今持っている能力や気持ちを全部もって赤チャンからやり直したいとも語り、それができないつらさが治療者にひしひしと伝わってきた。

2ヶ月経過した頃の8回目の面接の時、2枚目の風景構成法による絵を書いてもらう。主なものの配置は1回目からその後ほとんど変わらないが微妙なところで変化していく。家の輪郭が前よりはっきりし、人は今度はA夫になった。家は休養にきている別荘かもしれないとのこと。ネコはその辺のネコだが自分になついていると語られた。

治療開始2ヶ月経過した頃、初回以来語られていなかったマスターベーションのことがA夫の方から話題にされた。ここに来るようになってからは、我慢しながらではあるがパンストを身につけることは一度もしていないということであった。ただしパンスト姿の女性が怪獣にやられる想像は今もずっと続いているということから、それは、A夫が幼児期から大学に入るまでずっと友達にいじめられてきたことと関係があるのではないかとということまでつながって

いった。今の塾ではじめて人間的に扱ってもらえたが、はじめはかえってそのことが不思議で居心地が悪かったとも語られ、治療者はこの人の問題の深い部分をのぞかされたような気がした。更に彼は内省を進め、自分がいじめられてきたのは、自分に自信がないことをいじめた奴らが本能的に見抜いていたからだろう。この自分の自信のなさ、体で知っているものがないということ。虫も花も本物は何も知らない。本当は何も知らないのだと訴え、あまりにも重い問題を今いっしょに共感し続けていく立場にある治療者にとってもつらい面接が続いた。

その頃、A夫は家の中を少しずつ変えていきたいと努力していた。かつては高校を出たら自分も父と同じように家から出たいと思っていたが、弟が気になってできないでいた。結局自分がこの家に最後までかわかなければならないのだろう。それをしなければ自分の問題（性癖）も解決しないのだと、A夫は早い時期から洞察していた。しかし現実とはなかなかむずかしいものであった。たとえば食事に関して、子どもの頃から冷凍ハンバーグを野菜もつけずに皿にコロンとおいて出されたのはとても寂しかったので、来年塾をやめたら食事時だけでも自分が店のレジに立てば母親がもう少し時間をかけて食事の仕度ができると思い、それを提案すると、母親が烈火のごとく怒り、「あんたは自分の卒業と就職のことだけ考えていればいいの」と、やられてしまう。今の家族を変えることは不可能に近いから、ある程度恨みがとれたら自分の新しい家族をつくれればいいのか。しかし今の家族をこれまでと見切りをつけてそれができるのだろうか。新しい家族でまた同じことをしてしまうのではないだろうか。A夫の気持は行きつ戻りつする。

3ヶ月経過した頃、3枚目の風景構成法による絵を書いてもらった。今回は自由追加の段階で家に2階がついた。家は自分の別荘で、今まではそこに自分の他に人がいるような気がしなかったが、今回は人がいるような気がする。それは弟か自分の奥さんと子どもだろうと。そして今までは寝るだけの家だったが今回はそこで生活をしているので風呂や台所もある。従って平屋では狭いので2階をつけたのだと言う。ネコは飼いネコに昇格していた。絵をかいてもらうと、着実にA夫の中に何かが育ちつつあること、及びA夫の本来持っている力の確かさを見せてもらえるような気がしてホッとするのであった。

夏の間、塾の先生の1人が所有する海の別荘へ友達や弟と何度か出かけ、A夫は真黒に日焼けしていた。9月に入ると、女性のパンスト姿の空想は以前に比べるとぐっと減り、楽になってきたと語るようになった。今までは寂しさをこういう空想で埋めていたのだろうけれど、今は未熟ながらも人間通しの付き合いの中でだんだん埋まってくるような気もするとも語られた。家庭の中では、夏まではあくまでA夫の来春卒業・就職にこだわっていた母親が、秋になって時期的にあきらめたこともあって、表面的には静かな日々が続いているようだった。この時期書いてもらった風景構成法の絵では、家の土台が更に堅固になりベランダもついて素晴らしい出来栄になってきて、A夫の家に対するこだわりの強さを感じた。

以上までが、9月下旬の症例検討会に出すまでの経過である。この検討会の席上、あるメンバーがポツンと次のような感想をもらした。「すごい内省力と言語化だと思う。だけどこれだけ深刻な問題をもった人の治療がこんなに速

くきれいに展開するのも不思議なような気がする。治療者にプレゼントしたい気持ちがそうさせているということはないのだろうか」その発言にひっかかりを感じた。治療者としてはA夫がかなり知的に高く、言語化能力に優れている人なので、なるべくこちらで知的解釈をしてしまわないよう気をつけてきたつもりだったが、A夫の口から場面の展開として、教科書通りのような言葉がでた時思わず体をのりだすところまではいかないまでも相づちに力がこもり、A夫に先を急がせてしまったことがあったかもしれないと思ったからである。そして間もなくその指摘を受け入れざるを得ないことがおきた。

11月下旬、A夫がはじめての海外旅行から帰った翌日来室した時のこと、治療者は当然他の患者さん達と同じく旅行中の興奮さめやらぬいろいろな話がきけるものと思って水を向けた。ところがA夫は、一瞬虚をつかれた顔をしてから「旅行のことはまだまとまっていなかったので」にごした。まとまった話なんてと、治療者があつけにとられていると、「今までここに来て深刻な内面の話をして、先生から助言をもらって、楽になって帰っていた。だから旅行中のまとまらない話をしようなんて思ってもいなかった。」と、治療者にとって手痛い答えがもどってきた。そして彼は続けた。「いつもここへ来る電車の中で、今日はこういう話をしようと考えてきていた。ところが今日は電車に乗っていてもニューヨークの地下鉄はあーだったとか位しか思いつかなく、正直言って、あれ困ったなと思っているうちにここへ来てしまった」と言うのだった。そして「今まで自分の性癖を自分自身の中で起きていることとは別のこととして切り離して、面接の中で理論化して話していたような気がする。でも本当は自分の日常生活の中

で起きていることだから、日常の生の生活、生の気持を話さなければならなかったのだ。」と、そして「たぶん、そういうことはわかっていたんだと思うけど、自分の感じたままを人前で出すと、とりみだしてしまって、始末にないことになるのではないかという不安があったから、まとまった話（理性的に整理された話）をしていたのだ。」とも話した。しかし、そう話した後、A夫は、子どもの頃の生々しい体験を次々に話した。話しているうちに、今まですっかり忘れてしまっていた昔の事を急に思い出し、「あっそういえばこういうことがあった……」「なんで今まで忘れてしまっていたんだろう。どうして今急に思い出したんだろう。」と言う場面もでてきて、中からつき上げてくる感情の波にとまどっているようでもあった。そしてこれからの面接が今までと違ったものになることを予感し、「今日のような話がこれからずっと続く」と不安をもらした。治療者も少し心配になった。それは、A夫が今まで心の奥深くしまい込むことによってかろうじて精神の安定を測ってきた無意識レベルのドロドロしたものが急激に出てきては困ると思ったからである。しかしその後、回を重ねるにつれ、A夫は新しい展開を自分のものにしていき、彼は話

すことを用意することなく来室し、治療者と向かいあってから思いついたことを話すようになった。それはA夫が何年間も表現することなく心の奥底に沈めてきた生の体験、生の感情であった。「腹にたまっていることは出さなきゃならない」「悲しいことは、悲しいと言わなきゃならない」「子どもの頃10gの悲しさに、10gの『よしよし』をしてほしかった。でもそれをしてもらえないうちに、何もなかったかのように思いこむことが上手になってしまっていた」と。「でも不思議と、ここで吐き出していくと、逆に家でいろんなことが自然にできるようになった。前は意地や抵抗があつてできなかったのに」と、報告するようになった。

今、治療は明らかに新しい展開を迎えている。今、治療者は、9月下旬の検討会であの貴重な指摘を受けることがなかったら、11月下旬の転期をはっきり自覚することなく、A夫が言ったように、毎回彼の気持を少し楽にする言葉を与えという面接をくり返していたかもしれないと思う。

最近書いてもらった5枚目の絵では、前の4枚の絵に比べると色が随分濃くぬられていた。「今日はしっかりぬりたかったんだ」というコメントがついていた。

なおこの症例検討会に興味をもたれ、一度のぞいてみたいとお思いの方は、開催日などについてJ A S C T事務局にお問い合わせ下さい。

男女における性的刺激のパターン についての精神生理学的研究

(A Psychophysiological Exploration of
Sexual Arousal Patterns IN Females
and Males.

Julia R. Heiman

Psychophysiology 14, p.266-274, 1977

日赤医療センター 野 末 源 一

59人の女子学生と39人の男子学生を被験者として、4種類のオーディオテープ（エロチックな部分とロマンチックな部分に分かれている）を聞かせ、性的な刺激にどのように反応したかを自分でレポートすると同時に、外陰部の変化を記録した。学生を集め、検査の内容を説明した。被験者になるのがいやな場合には、そのようにした。

テープはボルノグラフィーを使用し、a) 女性の反応、よろこび、外陰部に中心をおき、男性がinitiativeをとる場面、b) 女性から誘い、男性が中心であるもの、c) 女性から誘い、女性が中心であるもの、d) 男性から誘い、男性が中心であるもの、の4種類から成り立っている。

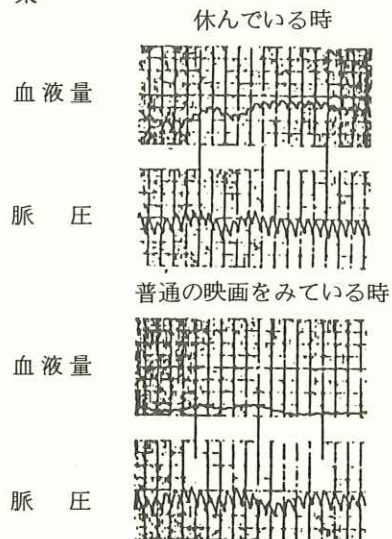
陰茎の生理的变化の記録には、Beckman type R 411 Dynograph を使用し、陰茎の周囲をゴムでおおった水銀のストレイン・ゲージ (Parbs Electronics) を使用した。陰茎の脈差、血液量を常時観察した。女性では、腔プレチスモグラフィーを使用 (G. Sintchak & J. H. Geer, 1975) した。又両性にも同時に、指の脈幅も、ゴムでおおった水銀のストレイン・ゲージを使って観察した。

その結果は、ロマンチックなテープは、男性にも女性にも性的な変化をおこさせなかった。

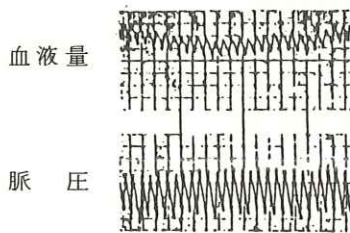
テープの中で伝統的な男性と女性の役割とは異った女性が積極的な場合が、より女性を性的に刺激した。男性では、そのような違いはみられなかった。生理的な変化と主観的なレポートとはほぼ一致したが、女性にあっては、その関連性はやや劣った。

外陰部の脈幅が、性的被刺激度の一番信頼出来、正確なインジケーターと思われた。心搏数、指の脈幅には変化にみられなかった。

結 果



エロティックな映画を
みている時



勃起陰茎測定についての周囲長と 容積の比較について

(A Comparison of Volumetric and
Circumferential Measures of
Penile Erection)

David Wheeler and H. B. Rubin
Archives of Sexual Behavior,
Vol. 16, No. 4 P. 289-299. 1987

性的被刺激度を客観的に測定するためには一般に、陰茎の大きさの変化をモニターする。従来、陰茎の周囲長が計られるが、容積を計った方がより敏感であり、従って効果的であると報告されてきた。再確認のために、6人の被験者にエロティックなビデオをみさせ、周囲長と容積を両方比較した。両計測とも、有意の相関があったが($r = .68$)、容積測定の方がより繁

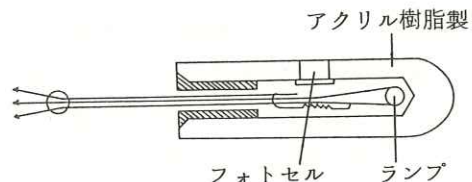
雑であり、ゴムで掩った水銀圧よりも敏感であることはなかった。

腔プレチスモグラフ装置

(Vaginal Plethysmograph System)
George Sintchak and James H.
Geer Psychophysiology, Vol. 12,
No. 1, P. 113-115 1975

腔内の血流増加を測定するための装置を開発した。装置の概要は図の通りである。透明なアクリル樹脂を使用し、直径は約 $\frac{1}{2}$ インチ(1.27 cm)である。フォトセルと光源とをそなえ、反射光をフォトセルがとらえるようにしている。

ただ難点は、足を動かしたり、組んだりしても少しの変化があるだけであるが、マスターベーションでは、人工による変化が著しい。従って、精神的な影響による腔内の血流増加を計るのに適している。



【新刊紹介】

日赤医療センター 金子 和子

初潮マンガ「おんなのご物語」

原作・佐藤滋子

まんが・岡本ゆり

監修・堀口雅子

小学館 ￥580

世の中はマンガ時代で、子供向けやコミックなもののみならず、財テクや料理等もマンガで語られるようになってきている。こうした動きに応じて出された初潮を劇画形式でとり上げた少女マンガを紹介したい。

それは、「小学五年生」に掲載されていたのをまとめたこの「おんなのご物語」である。マンガのストーリーがそのまま女の子の初潮体験と重ねてあり、読者（初潮を迎える時期の女の子たち）が無理なく初潮への心の準備ができるように配慮されている。また、女の子の体のしくみ、男の子の体のしくみ、性被害、愛情、妊娠についてもストーリーの中で自然に語られているので、いわゆる学習マンガとは一味違う親しみを感じさせ、子供達が性について考えるよいきっかけを与えるだろうと思われる。

この「おんなのご物語」を監修した虎の門病院産婦人科の堀口雅子氏は、1987年8月に京都で開かれた日本思春期学会に於て、小学五年生の女子の意識調査を発表した。アンケートは「おんなのご物語」掲載の小学五年生誌上で行われたが、それによると、「月経を知っているか」の問には「知っている」が60%、くわしくは知らないが37%、知らないが3%であった。知っている子供については、学校で教わったと

の答えが42%で一番高かったが、実際に初潮になった時一番先に相談したのは82%が母親と答え、担任の先生や養護の先生の6%をはるかに上まわる。

現在多くの学校で初潮についての授業がなされるのは、5年生の夏休み前の1・2時間というのが実態ではなかろうか。女性の複雑な生理のしくみを理解し、しかも初潮という女性の人生の節目の一つに当る事件を自分に引きうける準備をするには1・2時間では少なすぎよう。また最初に相談される母親にしても、月経についての十分な科学的知識を持っているとは限らないし、性へのタブー意識も手伝って、子供への対応が十分にできない場合も多いと思われる。

原作を担当している佐藤滋子氏は同じく堀口雅子氏の監修で「もうすぐですねー初潮のほん」（自由企画出版）を出している。これは、佐藤氏が自分の娘が初潮を迎えるに際して、良い本はないかと探しまわったが適切な本が見つからず、自分でつくる事になったのだときいている。初潮を迎える娘に十分に対応する自信のなかった母親の賢明な解決策といえよう。「もうすぐですね」のオビには“お母さんから娘へのプレゼント”とうたわれているが、同じ姿勢が「おんなのご物語」にも貫めかれていて、子供が自分で読める性教育の入門書として恰好の本である。

初潮をどの様にとらえたか、女性のアイデンティティにとって大きな要素である。女の子達にとって月経は大きな意味をもち、時として、身体的には不快な、心理的には恥しい事、即ちマイナスイメージでとらえられやすい。しかし女性が自分らしい生き方をできるためには、まず自分が女性である事を肯定的に受け入れられる事が必要である。学校でも家庭でも十分な性

教育が望めないという現状の中では、この「おんなのこ物語」のように、直接子供に語りかけ

る形の性教育の本が、ますます重要な役割をはたす事を思われる。

編 集 後 記

- 遅くなりましたが、Vol 5, No 2号をお届けします。JASCTの第17回研修会の中の主要な講演と昭和62年性科学会発表の一部の論文を収載しました。
- 本誌には学術誌としての役割と教育啓蒙的な役割がありますが、とくに前者を充実させたいと思います。原著の研究論文の投稿をお願いします。
- AIDSをめぐる性科学的問題は、重要でホットなテーマでもあり、この領域での研究成果をお持ちの方は、是非とも投稿下さい。
- 編集についてのご希望やご意見をお寄せ下さい。

(編集担当 河 野)

